

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(解答は全て句読点、記号も一字とする。)

ミュージカル『ファニー・フェイス』なども、まさしく、1、をその主題のひとつとしていた。映画版(邦題『パリの恋人』)では、オードリー・ヘップバーンがその主人公だったが、書店ではたらく何の変哲もない、そしてどちらかといえば風変わりな顔をしているその主人公は、あるとき、ファッション・デザイナーのXにとまる。デザイナーは、この主人公の髪型をかえ、眉や唇にメイク・アップをほどこし、優雅なドレスを着せる。すると、さつきまで(a)ヤボとしかいいようのない容姿だった女性が、たぐいまれなるファッション・モデルに生まれかわってしまうのである。それは、これまでYをかえ品をかえてつくられてきたシンデレラ伝説のひとつであるにすぎず、物語の筋としては他愛ないけれども、化粧や装身によって人間がどうかわるか、という問題をかんがえると、わたしは『ファニー・フェイス』を思い出してしまうのだ。

日本における化粧や装身については、江馬務先生の労作があり、ここでも、その起源は宗教的なものにもとめられるのだが、しかし、現代の女性たち、ときには男性たちにとって、化粧という行為はおそらく宗教的なものとはいっさいかわりがなくなっているはずである。それは、うつくしくありたい、という願望のあらわれであり、その願望をみたすために、クリームだの口紅だのが用いられるということになる。そして、その願望がいかに強烈であるかは、日本の広告界における最大の広告主のひとつが化粧品メーカーである、という事実からもわかる。その効果がどれだけのものであるか、は疑わしい。しかし、化粧品によって、ひとは、その素顔ではないもうひとつの顔をつくると努力するのである。そうした願望は、かりに、変身願望とよんでいいものであるかもしれない。そして、このような文脈でみると、化粧品メーカーや服飾メーカーは、「変装産業」という名でよばれるのがふさわしいだろう。

女子高校生が駅のロッカーに私服をいれておいて、学校からの帰りがけに制服と着替えて街をあそびまわる、という風俗はすっかり定着してしまったらしい。大都市の盛り場に奇怪な化粧と服装で登場する彼女たちをうごかしている心理がどのようなものであるかはさだかではないが、あれもまた、ひとつの変身願望のあらわれといってさしつかえないだろう。とにかく、ひとは、かわりたいのである。あるいはかえてみたいのである。

そして、ふしぎなことに、装身や化粧によって、外面的にみずからをかえることは、微妙なしかたで人間の内面をも変化させる。女性の化粧を笑う男だって、たとえば、紺のスーツにZをかため、ネクタイをきっちりとしたときの気分と、浴衣がけでザシキにアグラをかいているときの気分とのあいだに、おどろくべき相違があることを経験的に知っているはずである。いくら外面がかわっても内面がかわらない、という人物がいるとすれば、それは、よほどの心理的ヨクセイによって精神が硬直している人間か、さもなければ、よほど鈍感な人間である。ちよつとした色どりのちがいが、そして、ちよつとした顔の手入れそのことによって、ひとの気分がかわり、精神がかわる。「別人のような」という表現が、こうした変化の感覚をあらわすのもっとも適切である。そして、そうした感覚は、程度の差こそあれ、われわれのすべてが共有し、かつもとめているものなのではないか。

だが、そういうおそろしい可能性をいっばつに見据えながら、なお、ひとはなんらかのかたちにかわりたいのである。そして、その欲求ないし願望をもつと素朴かつ善意に解釈してみるなら、それは、人間のこころのなかにある一種の向上心のようなものとかかわっているのではないか、とわたしはおもう。つまり、人間は、こころありたい、という理想的自我をどこかに描いていて、その理想像にみずから近づける努力を怠ることがないようなのだ。これまた、まことにチンプな例だけれども、幼い子どもたちに、将来、どのようになりたいか、を問うてみたらよい。このこころの子どもは、夢をもっていないとか現実的だとか、教育評論家たちはいうけれども、それにもかかわらず、子どもたちは、たとえばパイロットになりたい、野球選手になりたい、作家になりたい、といった夢を語るであろう。そして、そういう将来の、自分のありうるすがたをかんがえるとき、子どもたちは、そこに、いわば変身した自画像を描いているはずなのである。

じつさい、子ども用のテレビ番組やマンガ本に登場する人気者をブンセキしてみると、その多くが変身願望を充足させる機能を果たしているようなのだ。たとえば、「ウルトラマン」にはじまる一連のふしぎな人物たちは、ひとりのこころを、奇声を発しておどろくべき超自然的な能力の持ち主に変身するのである。なかには、「変身!」とわざわざかけ声を発する人物さえいる。もとより、この人物たちは「スーパーマン」の焼きなおしにすぎず、その筋立ては同工異曲であって、芸術的価値がどれだけあるかは疑わしい。だが、そうしたものでありながら、それがYをかえ品をかえてテレビの画面に登場するたびに子どもたちを強くひきつけて離さない、というのも社会的事実なのである。

子どもばかりではない。おとなだって、じつのところ、似たようなものだ。サラリーマンの生活は平凡だ、と多くのひとはいう。十年一日のごとく、変化というものがこれっぱかしもない、という。しかし、若い社員であるなら係長に、係長なら課長に、それぞれにみずからが変身している状態を、ときには思い浮かべているはずなのだ。現実にあるがままのじぶん以外の自我を想定し、その想定された自我に乗りうつって幻想の世界をさまよう能力は、心理学でいう同一視の能力というものである。その能力あればこそ、人間は、現実の自我をはなれて、別世界をさまようことができるのである。

問一 傍線部 a ～ e のカタカナを漢字に直しなさい。

- a 野暮
- b 座敷
- c 抑制
- d 陳腐
- e 分析

問二 空欄 1 に最も適するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が仕事によってどうかわるか
- イ 人間とミュージカルの関係
- ウ 人間が化粧品や装飾品を買う行為について
- エ 人間が化粧や装飾によってどうかわるか
- エ

*映画版『フアンニー・フェイス』は、「風変わりな顔をしている」主人公が、「髪型をかえ、眉や唇にメイク・アップをほどこし、優雅なドレスを着」ることにより、「たぐいまれなるファッション・モデルに生まれかわってしまう」という物語である。その物語文が読み取れば、「人間が化粧や装飾によってどうかわるか」が、その主題の一つとなることが明らかとなる。また、同段落の後半部に「化粧や装身によって人間がどうかわるか、という問題を考えると、わたしは『フアンニー・フェイス』を思い出してしまっただ」という部分から、ミュージカル『フアンニー・フェイス』のひとつの主題が、「人間が化粧や装飾によってどうかわるか」となる。

問三 空欄 X Y Z に、それぞれ体に関する漢字一字を入れ、慣用句を完成させなさい。

- X 眼(目)
- Y 手
- Z 身

*眼(目)にとまる・・・見て、特に関心を引く。 際立って見える。
 手をかえ品をかえ・・・あれこれと方法をかえる。
 身をかためる・・・しっかりと身支度をする。

問四 傍線部 1 「このような文脈」とあるが、具体的にはどのような文脈のことか。解答欄に沿って、本文を参考に、四十字以内で述べなさい。

| | |
|------------------------|--------|
| 美しくありたいという変身願望をみたすために、 | ひとが化粧や |
| 装身に よって、素顔ではないも | うひと |
| の顔をつくるうと努力する() | 3 6 字 |
| | という文脈 |

*「第 1 段落」段落中における「その願望」「そうした願望」は、先行文中における「うつくしくありたい、という願望」である。「うつくしくありたい」という願望を「かりに、変身願望」とした場合、「願望」を満たすために、「何によって(化粧や装身によって)」「何を(素顔ではないもうひとつの顔を)」「どうするのか)」「つくろうと努力する()」といった文脈が把握できる。

問五 傍線部 (A)「らしい」「らしい」(B)「ようなのだ」の文法的な説明として正しいものを、以下の選択肢の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 「らしい」は根拠のある推測であり、「ようなのだ」は客観的な判断による推測
- イ 「らしい」はある根拠をもとく推測であり、「ようなのだ」は自身の内的感覚をもとく判断
- ウ 「らしい」「よむ」の「よむ」は主観的な判断による断定
- エ 「らしい」は自身の感覚をもとく断定
- イ

*問題文中における「らしい」の使用例を見た場合、「風俗はすっかり定着してしまっただらしい」とある。「定着」という根拠をどこからか入手して、推測していると考えられる。それとは対照的に、「よむ」の使用例は、「よむわたしはおもつ。つまり、よむ急ることはないよむだ」となっているが、「よむ」でのポイントが、「よむわたしはおもつ」という自身の内的感覚によって、「よむ」以降自身の判断が端的に述べられていると考えられる。

問六 傍線部2「そうした感覚」を具体的に説明したものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 精神が硬直し、鈍感である人間の気分や精神に変化があり、あたかも別人のようになった感覚
- イ あたかも別人のように、気分がかわり精神がかわったかのような感覚
- ウ 硬直した精神をもつ鈍感な人間が、あたかも別人のようにかわった感覚
- エ 化粧や装身によって気分がほぐれたような感覚
- イ

* 問題文中の「そうした感覚」とは、『別人のような』という表現が、こうした変化の感覚「ことであり、こうした変化」とは、「ひとの気分がかわり、精神がかわる」ことである。以上のことから、「そうした感覚」の具体的な説明として適する選択肢は「イ」となる。

問七 本文には次の段落が欠如している。この段落が入る直前の段落番号を記しなさい。

なにゆえにわれわれが変身したいのか その理由はわからない。しかも、変身願望のなかにひそむ不安に着目した作品として、カフカの『変身』がある。この小説の主人公は、ある朝、目覚めて、じぶんが一匹の虫になってしまっていることを発見する。虫になってしまった以上、人間世界からは完全に疎外される。声を出してみても、もはや人間とのあいだの、人間的な交流は絶たれてしまっている。そこにあるのは、不安と絶望以外のなにものでもない。この変身ファンタジーは、悪夢である。

* 「第 段落」はじめの「そういうおそろしい可能性をいっばうに見据えながら」とは、「変身願望」の二面性のことを指す。第 段落における「外面的にみずからかえることは、微妙なしかたで人間の内面をも変化させる」ことが「変身願望」の一側面であるなら、もつひとつの側面は、「そういうおそろしい可能性」である。具体的には、「変身願望の中にひそむ」「不安と絶望」という「おそろしい可能性」である。つまり、欠如した段落は「第 段落」の前、「第 段落」の後となる。

問八 傍線部3「同工異曲」について答えなさい。

(1) 読みを平仮名で答えなさい。
どうこういきよく

(2) 同じ意味として用いられる四字熟語を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大同小異
- イ 同床異夢
- ウ 多種多様
- エ 変幻自在
- ア

* 同工異曲・・・ 外見は違っているようだが、内容は同じであること
大同小異・・・ 小さな違いはあっても、大体が同じであること。また、そのさま。

問九 傍線部4「似たようなものだ」とあるが、どのような点で「おとな」は「子ども」と似ているのか。解答欄の形式に沿うよう、本文中から十字以上十五字以内で抜き出しなさい。

変身した自画像を描いている……という点

* 「おとな」と「子ども」の共通点を考えた場合、「子ども」は「パイロットになりたい、野球選手になりたい、作家になりたい」という、「将来の、自分のありうるすがた」としての「変身した自画像を描いているはずなのである」。「一方「おとな」も、「若い社員であるなら係長、係長なら課長に」なりたいたいという「みずからが変身している状態を、ときには思い浮かべているはずなのである」。「以上から、「おとな」も「子ども」も、「変身した自己を描いている」という点が似ている。「解答欄に沿うよう」「に抜き出すと、「変身した自画像を描いている」が正解となる。

問十 傍線部5「平凡だ」と同じ意味で使用されている慣用句を、本文中から五字以上十字以内で抜き出しなさい。
変哲もない／何の変哲もない

* 平凡・・・ 特にすべれたところや変わったところがなく、ありふれていること(さま)。
(何の)変哲もない・・・ 特に取り立てて言うほどのこともない。平凡である。

問十一 以下の選択肢の中から、本文の内容に適するものをすべて選び記号で答えなさい。

- ア 化粧による変身願望は、現代の女性特有のものとなっている。
- イ 程度の差はあるものの、ひとは外面を変えることにより内面は変わるものである。
- ウ おとなと子どもが決定的に違うのは、前者が変身願望を全く抱いていないという点である。
- エ 芸術的な価値の有無はともかくも、子どもが夢中になるテレビ番組やマンガ本には、自身の変身願望を満たす人気者が登場する。

イ、エ

*「ア」は、「現代の女性特有」が不適切。「ウ」は「おとな」が「変身願望を全く描いていない」という点「エ」が不適切。